現代中国語の比較文における“要”の機能

小野　秀樹

1. 問題提起と考察対象

現代中国語（共通語）の比較文には、例（1）（2）のように“要”が共起する文が存在する。

（1）国际性企业所做的广告往往要比地区性企业多得多。　（《哈佛管理培训系列全集》）

（2）她付出的艰辛比正常人要多几倍。　（1994 年报刊精选）

この“要”について、《现代汉语八百词》は以下のように記述している。

（3）表示估计，用于比较句。‘要’可以用在‘比…’的前或后，也可以用在‘得’后，意思不变。［見積もり（推量・推断）を表し、比較文に用いられる。‘要’は‘比…’の前か後に用いることができ、‘得’の後に用いることもできるが、意味は変わらない］

比較文に共起する“要”の研究は、概ねこの《现代汉语八百词》の記述を参照しており、また殆どの先行研究がこの記述内容を支持していると言える。しかしながら、次節および第 5 節で詳述するように、先行研究の分析と結論にはそれぞれ首肯しかねるところがあり、正確な記述と考察がなされているとは言い難い。本稿は、独自の実例調査と母語話者に対するアンケート調査に基づき、比較文で用いられる“要”の機能についてあらためて考察し、新たな分析を提案する。

筆者はかつて、前置詞“比”を用いた中国語の比較文（“比”字句）を次の 2 種類に分類した。

（4）**「単純比較文」**：“A ＋比＋ B ＋ W”（A と B は比較項、W は形容詞句を示す）のかたちで、ある基準によって実際に二者を比較し、その優劣を表す文。

e.g.）小王比小李大。／他对北京比你熟些，让他来决定吧！

「特性記述文」：“A ＋比＋ B ＋更／还＋ W”のかたちで、比較文という二者を比べる形式を用いているが、その優劣のみを表すのではなく、比較項 B の属性を用いることにより、主語 A の特徴・性質を述べる文。

e.g.）小李比小王更高。／这些讨债的人比黄世仁还凶。

（小野 1998）

今回の調査対象としては、形容詞（句）を主要述語とする“比”字句を対象とし、かつ、“要”の有無による違いを明確に弁別することを目指す意味から、程度副詞が共起しない単純比較文の“A ＋比＋ B ＋ W”と、それに“要”が付加される“A 要比 BW”および“A 比 B 要 W”を具体的な文型として取り上げる。なお、“A 要比 BW”における“要”が明らかに「義務」「願望」を表す文は、本稿で扱う“要”とは異なるものとして考察対象に含めない。

2. 先行研究の分析における問題点

比較文に共起する“要”を専一に考察した研究として、国内では森宏子 1996 が挙げられる。この論文では、比較文に共起する“要”は、近未来の事態発生を表す“要”［もうすぐ／今にも～する］（e.g.“天要下雨了。”）、および習慣的・反復的事象の可能性を表す“要”［～することにしている・～するものだ］（e.g.“我现在天天吃药, 经常要去医院复查。”“这种螺丝有时要松动。”）と区別する必要はないと認定した上で、比較文の“要”も「趨勢・可能性」を表すものだと分析する。さらに、“要”は二者の比較項を別個の 2 点ではなく、連続的可変的な軸上にあるものとして捉え、当該の比較される事態や状態がある方向へ傾斜していることを表すと結論づけた。比較項が連続的可変的な軸上にあるというのは、例（5）（6）の“要”を同一視することで得られる分析である。

（5）天阴了，要下雨了。

（6）坐飞机比坐火车要快得多。　　（例（5）（6）は森宏子 1996 から転載）

この 2 つの文が表す状況を、森氏は次のようなイメージで捉えている（下の（7）（8）の図は、森宏子 1996 に掲載された図に従うものだが、以下の説明のために小野が一部を改変・補筆している）。

（7）近未来の“要”　　曇り　　雨

［時間の流れ］……（現在）…・—（近未来）⟶

（8）比較文の“要”　　火车　　飞机

［比較基準］慢……・⟶快

以上の森氏の分析にはいくつかの疑問点が存在する。まず、「趨勢」「傾斜」という分析であるが、近未来の“要”は、発話時点では未実現の事態について、それがもうすぐ起こりそうだということを表す。上の例（5）において、発話時にまだ雨は降っていない。ゆえに「趨勢」を表すと言えるが、比較文においては、文全体が未来のことについて言及しているのでなければ、比較とその結果は現実のものである。例（6）において、飛行機の方が列車よりはやいというのは周知の事実である。この点において、比較文の“要”が趨勢を表すという分析は文の表す意味と抵触する。また、“要”が傾斜を表すという分析も、そもそも二者を比較して優劣があれば「傾斜」は存在するので、“要”の付加によって初めて文に傾斜の意が加わるというのも妥当な分析とは言い難い。

別の疑問点は、二者の比較を連続する同一線上における「幅（の変化）」と分析していることである。例（5）を（7）のようなイメージで捉えることには何ら問題はない。それは同一地点における天候の変化について述べているからであり、そこには自ずと連続性と可変性が存在する。しかし、異なる事物や人物を比べる比較文においては実情が大きく異なる。例（6）において列車と飛行機そのものには連続性は存在しないし、列車（の速度）が変化して飛行機（の速度）になるわけでもない。上のイメージ図（7）と（8）では横軸（点線＋実線）の意味が異なっており、それが両者の違いを端的に表している。近未来の文の横軸は「時間の流れ」であり、比較文

の方は「比較基準」である。図（7）では同一空間の状態（天候）の変化が示されているのに対し、(8）では基準軸上に2つの項目が序列的に並んでいるだけである。以上のことから、比較文の“要”と近未来および習慣的・反復的事象の可能性を表す“要”を同一視する森氏の分析に本稿は同意できない。

次に中国での研究を俯瞰すると、複数の先行研究が存在するが、結論は2つに集約可能である。ひとつは、比較文の“要”は“估计或主观判断”［推量または主観的判断］を表すという《现代汉语八百词》の記述を継承するものであり（蒋平 1979・许国萍 2005・何雨芯 2014)、もうひとつは“强调自己的判断”［自分の判断を強調する］を表すというものである（古川裕 2006・何雨芯 2014)。また、強調と類似するものとして、“要”は直後の要素を際立たせる（中国語で“突出”）と分析する先行研究も複数存在する。すなわち、“要比”のかたちであれば直後にある比較項Bを焦点化し、述語形容詞の直前に“要”が共起する場合は、その形容詞句（つまり比較の結果）が焦点化されるということである。以上の分析以外に、邵敬敏 1992 のように比較文の“要”に義務や願望の意を認める論考もあるが、これは少数派である。本稿では主要な2つの分析について検証する。

“要”が「推測」や「主観的判断」を表す比較文に共起する実例は確かに存在する。

(9) 今年韩国、新加坡、中国香港和台湾地区等新兴工业经济的增速可达6%至7%，中国的经济增长速度也将比预计的要快。（2000年人民日报）

(10) 小静自打开始有手机已经是第四个年头了，只换过一部。因为最早那部手机不支持中文短信息，可对小静来说，手机的短信功能比通话功能要重要得多。（《新时代“白骨精”的十一个“子”》）

(11) 史光柱对声音特别敏感，录节目前在后台时，主持人鲁豫上前跟史光柱简单地打招呼，他听音后对鲁豫说：“你的声音听起来比电视上要年轻！”（《鲁豫有约：沉浮》）

例（9）には近未来に実現が見込まれることを表す副詞“将”［間もなく～しようとする・きっと～するだろう］が共起しており、疑いなく推測を表す文である。例（10）では“对小静来说”［小静にとっては］という句が前に付いており、あとに続く比較文の内容が小静という人物の個人的な認識であることを明示している。また例（11）では“听起来”［実際に聴いてみると］という句の挿入によって、話者が現場での体験に基づいて個人的な判断（評価）を述べていることがわかる。

しかしながら、このような文が表す「推測」や「主観的判断」という意味を、“要”に求めるのは正しくない。たとえば、次の（12）は（11）と同様に“听起来”が共起する比較文であるが、“要”は共起していない。それでもこの文は、やはり主観的判断（評価）を表している。

(12) 赖和尚听房，特别爱到大户人家的窗下听，说听起来比一般人家有意思。（刘震云《故乡天下黄花》）

さらに、実例を調べてみると、“要”が共起する比較文では、「推測」を表す語が複数併用されている文も存在する。

(13) 肇庆观众如果到赛场观看摔跤比赛的话一定要有耐心，估计决赛中的申诉可能要比预赛多得多。（新华社 2001年11月份新闻报道）

(14) 专家推测，中华文明的国家起源可能要比目前人们认可的夏代早上千年，中国古代三皇五

帝的历史传说有可能被考古证实为真正历史。　（2000 年人民日报）

“可能”は「～かもしれない」という意味の副詞であるが、これを用いて「推測」を表している比較文であっても、“要”が共起しない文も多数存在する。

（15）江苏的整体经济水平可能比安徽高，但透过能给人第一印象的公路，我深切感到了安徽对吸引外来投资渴望与真诚。　（1994 年报刊精选）

（16）在西非的加蓬共和国能找到裂变产物，表明大约在 15 万年前这里的铀矿床曾“超过临界质量”。当时铀 -235 的含量可能比现在高。　（CCL\ 当代 \CWAC\SCB0400）

以上の言語事実から、“要”が比較文において「推測・推量」の意味を担っているとは考えにくい。例（13）では、比較文の前に“估计”という動詞が使われている。比較文の“要”が《现代汉语八百词》の記述するように“估计”の意を表すのであれば、同義語が二重に重なることになる。また逆に、“要”がなくとも「推測」を表す比較文は問題なく成立し、実際に多数存在している。

ここで、先行研究における分析の中で主流のひとつとなっている、「“要”が主観的判断を表す」ということについて、さらに考えてみたい。そもそも、比較構文の主要述語となる形容詞が「感性・感覚」などに基づいて認定される性質や状態を表す場合は、次の例（17）から（19）のように、“要”が共起していなくとも、文は「主観的判断」を表す。

（17）这家饭馆的菜比那家的菜好吃。

（18）王力宏比周杰伦帅多了。

（19）鲁豫：第一次见周迅有没有惊艳的感觉？

沈畅：没有，其实周迅是一个特别上相的人，我见她的时候真没有觉得她很漂亮，只是感觉她很瘦。但是我觉得她现在比以前漂亮多了。　（《鲁豫有约：红伶》）

“好吃”［美味しい］、“帅”［ハンサムである］、“漂亮”［美しい］というのはすべて個人の主観に基づいて判断される特性であり、そもそも客観的な評価を下すことができないものである。例（17）から（19）は“要”が共起しない比較文であるが、いずれも主観的判断を表す文である。実際問題として、どっちのレストランが美味しいかということで意見が分かれるのはよくあることであるし、例（18）とは逆に、周傑倫の方が王力宏よりも格好良いと思う人も多数存在する。“小两口的晚餐这样做，美味又有营养，比点外卖要好吃很多倍。”における“要”が共起する比較文（下線部）の、「（自作の方が）デリバリーよりも何倍も美味しい」という評価が主観的で、そこから“要”を削除した“比点外卖好吃很多倍”が客観的記述であるという意味的対立は決して成立しない。“要”の有無にかかわらず、“好吃”が述語であれば、文は「主観的判断」を表す。

さらに、度量衡に関わる性質や状態を表す形容詞は、数値に基づく客観的な表現が可能であるが、それが主要述語の場合であっても、比較の結果の判定が個人の認識や感覚に基づくものであれば、“要”がなくとも、文は「主観的判断（または推測）」の意味を表す。

（20）“你比安琪拉结实，”他瞅着她说。“哦，是的，我跑起来总比安琪儿快，”她大声说。“有时候，我们打架，但是我总可以把东西从她手里夺过来。她不得不让步。有时候，我觉得自己好象比她大些 —— 一向是我带头。”　（西奥多・德莱塞《天才》）

比較文に共起する“要”は、文全体あるいは文の現れる環境から見て、「推測」や「個人の主

観的判断・評価」を表すと認定できる文にも用いられてはいるが、そのことから、“要”自身が「推量」や「主観的判断」を表していると分析するのは妥当ではない。上で見てきたように、「推量」や「主観的判断」という意味は、文中のさまざまな句や副詞、また形容詞自体の意味特徴など、種々の要素によって決定づけられるものであり、それをすべて“要”に負わせるような分析は、言語事実と乖離したものと言わざるを得ない。さらに、次の第3節で指摘するように、“要”が共起する比較文は、数値などの確固たる根拠を提示しつつ客観的事実としての比較の結果を述べる文や、定義や一般的認識、周知の事実など、主観的判断とは対極の意味を表す文にも用いられる。

以上が先行研究の分析における主な問題点である。一言で言えば、従来の研究は、比較文に用いられる“要”に対して、いずれも語義レベルの解釈を行なってきたことに不首尾の原因があるように思われる。次の第3節と第4節では、本稿が実施した調査とその結果について述べる。

3. コーパスの実例調査から判明した実態

前節の最後で述べたように、北京大学CCLコーパスで実例を調査すると、内容や文脈から考えて、推測や個人の主観的判断ではなく、「定義」や「客観的事実」、「調査結果」、「一般的認識」を述べている比較文にも“要”は共起する。本稿が採取した実例の一部を以下に挙げる。

（21）城镇不同于乡村的本质特征有这样几个：①城镇是以非农业人口为主的居民点，在职业构成上不同于乡村；②城镇一般聚居有较多的人口，在规模上区别于乡村；③城镇有比乡村要大的人口密度和建筑密度；……　（CCL\当代\CWAC\SGB0432）

例（21）は都市と農村部の違いを説明する学術的文献の文章の一部である。箇条書きで書かれている各項目は、一種の定義と言える。無論、推量や個人の主観とは無縁の記述である。

（22）最大的鱼是鲸鲨鱼，有的鲸鲨长五十几英尺，重十五吨，比非洲象要重两倍。而最小的成鱼算是小刺鳍鱼。它还不至一厘米长。　（《读者》合订本）

（23）美国孩子长大后能打职业篮球的很少。中国孩子，这种机会就更小了，中国孩子多，而全国却只有14支甲A职业篮球队（级别再低一些的就很难称为职业球队了）。中国球员的薪酬要比NBA球员低得多，要想发财是异想天开。NBA发展联盟（NBDL）球员的年收入3万美金，中国的顶级球员年收入也并不比他们高。　（姚明《我的世界我的梦》）

（24）看到总书记愉快的神情，听着他平易近人的话语，王玉勤的父亲王克礼也与总书记聊了起来。交谈中，当江泽民得知这位健谈的老人今年72岁、属虎时，很高兴地对他说：“我们俩同岁嘛，我也是属虎的。”
王克礼笑着对总书记说：“我知道，我看过你的简历。”
江泽民高兴地笑了起来。笑声感染了王克礼。他接着说：“总书记是8月的生日，我也是。”江泽民惊奇地问：“你是阳历还是阴历？”“阴历8月。”“那我比你要大一个月，我是阳历8月。”江泽民非常高兴，他指着老人银白的胡须说：“你留了胡子，我可没留胡子呀！”院子里又是一片笑声。　（1998年人民日报）

例（22）は魚類の中で世界最大のジンベイザメの体長と体重を述べている文であるが、比較の根拠となる具体的な数値が示されている（例文の波下線部。以下同じ）。直後にアフリカ象との比較が述べられているが、実際にアフリカ象の平均体重と比べてもこの記述は正しい。例（23）は

中国のプロバスケットボール選手の収入が、アメリカ NBA の選手に比べてはるかに低いことを述べている。そのあとで、NBA の予備軍である NBDL の選手の年俸が 3 万ドルであることと、中国のトップレベルの選手の収入がそれにも及ばないという事実を挙げることで、その根拠を述べている。例（24）は江沢民が 1998 年に新疆ウイグル自治区に視察に行ったときのエピソードであるが、自分と同い年であるという相手に誕生月のことを尋ね、陰暦と陽暦との差で自分が 1ヶ月年長であると述べた上で、しかし外見は自分の方が若いと言って周囲を笑わせたという話である。

以上は客観的事実に該当する実例であるが、具体的な調査結果に基づく例も少し挙げる。

（25）清明时节去河边赶集是古时的一种民俗活动，自北宋张择端之后，历朝历代都有名家以此为题材作画。仇英的《清明上河图》略晚于张择端的真迹，它比宋本要长一倍，达到 9.87 米，高度是 0.3 米，画中人物超过两千。（新华社 2004 年 11 月份新闻报道）

（26）您知道吗？芹菜叶比芹菜茎的营养价值更高，可遗憾的是人们吃芹菜时，习惯于只吃芹菜茎，不吃芹菜叶。这是一种很大的浪费。据科学分析，每 100 克芹菜叶中含蛋白质 5.5 克、脂肪 0.4 克、碳水化合物 2.5 克、磷 3.1 毫克、铁 35 毫克、钙 245 毫克、胡萝卜素 5.32 毫克、核黄素 0.3 毫克、抗坏血酸 91 毫克等。而每 100 克芹菜茎含蛋白质 2.2 克、脂肪 0.1 克、碳水化合物 1.4 克、钙 93 毫克、铁 23 毫克、磷 1.2 毫克、胡萝卜素 0.37 毫克、核黄素 0.1 毫克、抗坏血酸 11 毫克等。从营养分析来看，芹菜叶的营养价值要比芹菜茎高得多，应该改变这种不科学的吃芹菜习惯。（《养生与健美方法 100 例》）

例（25）は宋代の画家張択端と明代の画家仇英の《清明上河図》に関する説明である。仇英の絵の寸法が明記されているが、張択端の《清明上河図》は横 5.25m ×縦 0.26m というサイズなので、この記述も正確である。例（26）では、セロリの葉と茎の栄養素含有量が詳細に記載されている。

（27）迈克尔・H・哈特还说：“毛泽东和列宁之间的比较也是显而易见的，毛统治的时间比列宁要长得多，统治的人口比其他国家也多得多（事实上如果考虑到毛掌权的时间，他统治的人口比历史上任何其他人都多得多！）但列宁是毛的先辈，对毛有重大的影响，他在俄国建立了共产主义，为随后在中国建设共产主义开拓了道路。”（1994 年报刊精选）

例（27）は、アメリカの物理学者で、歴史に関する著書もある Michael H. Hart による毛沢東とレーニンについての発言であるが、両者の統治年数はレーニンが 1917～1924 年の 7 年間であるのに対し、毛沢東は 1945～1976 年の 31 年に及ぶ。これは周知の事実と言って良いだろう。

こういった具体的なデータに基づく比較文に“要”が共起する実例は枚挙に遑がない。この種の文における二者の比較は誰が行なっても同じ結果が得られるものであり、客観的事実である。

実例を調査していて、もうひとつ気がついたことは、比較文に“要”が共起する場合、文脈などから見て、従来の、あるいは発話時点での認識や前提を覆す実例や、相手にとって新規の知識を導入して伝えるという実例が多くを占めていることである。上掲の各例文もすべてそのことに該当するが、採取した例をさらに挙げる。例（28）から（30）は認識や前提を更新する実例である。

（28）虽然，可能有充分的理论来证实职权与职责的平衡原则是正当的，但在实际上，这个原则常常为人们所违背，并且，在授予人们职权与职责时，存在着很大的不平衡状态。令人遗

憾的是，大多数管理人员和下属人员的职责，往往要比他们所具有的职权大得多，这完全是由以下原因所致：……（《哈佛管理培训系列全集》）

（29）鲁豫：你领完奖下台之后打的第一个电话是给谁的？
周迅：给我爸妈，他们当时是在电视上看直播，但是因为电视上直播要比现场晚一个小时，所以当现场颁奖结束后他们在家看电视还没看到我领奖呢。（《鲁豫有约：红伶》）

（30）细细一想，多年以来，北京市里凡是又脏又累的苦活儿，早已没有北京人去干了，从古到今北京人逐渐变成了城市贵族。大家宁可忍受吃大锅饭的清汤寡水，也不愿放下架子从事平凡的劳动。外地打工族身上那种能吃大苦耐大劳的精神，难道不值得我们很好地学习吗？他们从贫苦的家乡出来，一条破被，一身破衣，独身闯北京，这需要多么大的勇气！而我们，有房子住，有着熟悉的生活环境和人际环境，要做好他们所做的那些工作，实际上要比他们容易得多。（1998年人民日报）

例（28）では、まず「職権と職責の平衡原則は正当である」ということが述べられているが、これが覆される前提となっている（例文の囲みの部分がそれに当たる。以下同じ）。あとの比較文では、大多数の社員にとって、職責の方が職権よりもはるかに大きいことが述べられている。例（29）は、パリ国際映画祭の主演女優賞を獲得した周迅が、受賞後真っ先に電話をした相手が両親であることを述べている文である。両親はその時にテレビで生放送を見ていたので、受賞と同時にそれを知ることができるだろうと思われるが、続く比較文で放送と現場にはタイムラグがあるという説明がなされ、同時という認識を覆す内容が述べられている。例（30）では、北京で生まれ育った人は、北京市内の肉体労働［原文を直訳すると「汚れて疲れ、稼ぎの悪い仕事」］には従事しないという事実を指摘した上で、実際には北京で生まれ育った人の方が、そういう仕事に従事することが条件的に容易であるということを述べている。次に、新規の情報を導入する例を挙げる（例（31）から（33）の囲みの部分から新規情報が導入される）。

（31）西安的主流媒体，其从业人员工资与当地整体工资水平相比较而言应该是不错的。据记者了解，其收入大致排序依次为《华商报》、《西安晚报》《三秦都市报》。其中《华商报》一个记者的工资可以拿到3000多块钱。优秀记者工资达到5000元也是大有人在。与此相比，《西安晚报》记者的工资则有所不及，但总体上还是相差不大。《西安晚报》一名组版编辑告诉记者，他一个月的工资要比他们本报记者低一些，一般就是1800到2500之间，记者则比其高。（《新闻媒体行业求职指南（下）》）

（32）霍桑效应老板是想通过这一实验未寻找一种提高工人生产效率的生产方式。的确，工作效率会受工作条件的影响，然而，出乎意料的是不管条件怎么改变，如增加或减少工间休息，延长或缩短工作日，每一个实验时期的生产率都比前一个时期要高，女工们的工作越来越努力，效率越来越高，根本就没关注过生产条件的变化。（CCL\当代\CWAC\APE0084）

（33）梁冬：重新发现中国文化太美，继续回来到《国学堂》。刚才呢，这个王东岳老师跟我们讲到孔子跟孟子最大不同，是因为孟子所处的时代比孔子时代呢要暴烈很多。当时的人呢，砍人，一砍砍几十万人，所以呢，整个社会生态环境呢已经变了，变坏了。所以孟子的学说也要对那样的一个变坏的时代做出一种反应。（国学堂 梁冬对话王东岳第九讲）

例（31）は西安の主要な新聞社の社員の給料について紹介している文章であるが、組版編集者から取得した情報を具体的な数字とともに伝えている。例（32）は労働者の労働条件と労働効率の

関係を検証する実験結果について述べる文であるが、その結果は“出乎意料的”［予想外のもの］であったということから、後続する比較文が伝える情報は新規のものであるのと同時に、実験者の予測を覆したものでもある。例（33）では、孔子の時代に比べて孟子の時代の世相がかなり荒々しかったという情報を導入し、そのあとで孟子の生きていた戦国時代の惨状を述べている。

以上は実用書や学術的な文章および発言からの実例であるが、新規の情報の導入という点から見れば、現場の実況における人物描写の文などもそれに該当する。

（34）在乌拉特前旗先锋河道管理段的一个护堤点旁，记者遇到了 35 岁的护堤员张二荣。他长着一副方脸盘，两道抬头纹，看上去要比他实际年龄大一些。他说，每年开河期间，他们都要日夜巡堤查险。（新华社 2001 年 3 月份新闻报道）

（35）最近偶遇多年未曾谋面的一位友人，她是美容师。算起来，她已经年过四旬了，可一点儿没有衰老之相，不施粉黛却越发年轻，体态轻盈，容光映人，看上去要比实际年龄小十岁。（王昕《黄帝内经中的女人养生养颜经》）

例（34）（35）はともに、現場で出会った人物の容貌を描写する文であるが、文章中新たに登場した人物に関する情報であるから、これも読者にとっては新規に導入された情報と言って良いだろう。

以上述べてきたように、実例調査の結果から、“要”が共起する比較文は、客観的あるいは一般的な事象について用いられている実例も多数存在し、さらに、前提や認識を更新したり、新規の情報を導入したりする場面で多く用いられていることが判明した。これらの点も踏まえた上で、筆者は母語話者に対して計 2 回のアンケート調査を実施した。次節ではその結果について述べる。

4. 母語話者に対するアンケート調査

1 回目のアンケート調査においては、情報のやり取りに関する話し手と聞き手の立場について種々の状況を設定した上で、“要”が共起しない比較文（以下、無標の文と呼ぶ）と“要”が共起する比較文（以下、有標の文と呼ぶ）の両方を提示して、それぞれの文の容認度を計 7 名の母語話者（20 代～40 代）に判定してもらった。有標の文では、“要”の位置が異なる 2 種類の文（“要比～”と“比～要”）を作成し、無標の文と合わせて 3 種の文を提示した。さらに、3 種の文で複数の文が許容される場合は、その中で最も自然な文があればそれも指摘してもらった。

合計で 10 通りの状況を設定して調査を行なった結果、無標の文だけが許容される状況や、逆に有標の文だけが容認される状況は皆無であった。つまり、設定したどの状況においても、母語話者は無標と有標の文の両方を合格と認めたのである。ただ、ともに成立する文の中で、どの文がより自然であるかという判定に基づけば、有標と無標の選択に一定の傾向があることが判明した。

無標の文の方がより適していると判定されたのは、次のような状況における比較文である。

（36）（複数の教員に対して連名でメールを送る必要がある学生に、宛名を書く順を説明する）
王老师比刘老师大，所以写电子邮件的时候，你最好先写王老师的名字。

（37）（前日の高気温に関する世間話）
甲：昨天实在是太热了，在外边儿走了一会儿就汗流浃背了。

乙：是的，昨天最高气温 37 度，太反常了。今天还不到 30 度，比昨天凉快得多。

（38）（他大学の人に自分が所属する研究科の留学生数の状況を知らせる。発話時は 2022 年）

2021 年 11 月的一项调查结果显示，我们研究科 2021 年有 366 名留学生，2020 年有 342 名。去年比前年多一点。

上の 3 つの文において、比較文で述べられている情報に対する話し手と聞き手の立場について説明すると、例（36）で話し手が提供しているのは、発話時には聞き手が把握していないが知っておくべき情報である。例（37）では前日と当日の気温について話しているので、情報（気温）は話し手と聞き手の双方が発話時点で有している。両方の比較文で述べられている情報は、聞き手が必要とする未知の情報か、すでに持っている情報かということになる。一方、例（38）は自分の所属先の留学生の数を相手に知らせている状況であり、聞き手はその情報を持ってはいない。その情報を聞き手が必要としているかどうかは（この設定と文だけでは）定かではないが、ただ、このような情報を提供する場面では、当然のことながら前提として、その研究科の留学生の数が話題に出ているか、他研究科を含めた状況などが話されている時であろう。また、例（38）の文を別の角度から見ると、過去 2 年の留学生数の比較をして、純粋にその優劣（多寡）を述べているということがわかる。同様に、例（36）も二人の教員の年齢差を問題にして、王先生の方が年長者であることを述べ、宛名を書く順（いわば一種の序列）を伝えており、例（37）も昨日と今日の気温（暑さ）を話題に取り上げて、両日の温度差が大きいことを述べていると解釈することが可能である。これらの比較文が、二者の優劣を中心的な情報として伝えていることは非常に重要な点である。

逆に、有標の文の方がより適切だと判定されたのは、次のような文であった。

（39）（電車の所要時間に関する相手の誤った認識を訂正する。調査対象は乙の発話する文）

甲：从横滨坐电车去吉祥寺，中间在新宿换乘京王线比一直坐 JR 快些。

乙：不，一直坐 JR 要比中间换京王线快些。／一直坐 JR 比中间换京王线要快些。

（40）（野球のことをよく知らない相手に対して、ドーム球場の広さの説明をする）

事实上，札幌巨蛋的面积要比东京巨蛋大得多。／札幌巨蛋的面积比东京巨蛋要大得多。

情報に対する立場について同様に考えると、例（39）（40）に関して言えることは、聞き手は誤った情報を持っていたか、あるいはその情報を知らない（なおかつ、それほど強い関心もない）かであり、発話された比較文によって、認識を更新させられるか、新規の情報を知らされることになる。これは第 3 節で実例調査の結果について述べた「比較文に“要”が共起する場合、文脈などから見て、従来の、あるいは発話時点での認識や前提を覆す実例や、相手にとって新規の知識を導入して伝えるという実例が多くを占める」という事実と合致する。また、例（39）において、乙は京王線と JR のはやさを比較して、単に両者の優劣を伝えているわけではない。会話の状況から見て、乙は甲の誤った認識を正すために発言しているのであって、たとえば相手からの質問（京王線と JR のどちらがはやいか）に答えているわけでもないし、乙からいきなり京王線と JR の所要時間の比較結果を伝えているわけでもない。文自体は二者を比較するかたちで述べているが、言いたいことは二者の優劣ではなく「JR 一本で行くのがはやい」という情報である。例（40）においても、話者が純粋に 2 つのドーム球場の面積を比較して、その優劣を述べているのではなく、暗に東京ドームの方が大きいと思っているだろうという前提や、札幌ドーム

がそこまで大きいことを知らないであろうという予測のもとに、札幌ドームの大きさについて（東京ドームを引き合いに出して）説明していると解釈することができる。以上が 1 回目の調査の主要な結果である。

2 回目のアンケート調査では、コーパスで採取した無標の比較文から 20 例を選び、その文に“要”を付加した場合の文の成否を調査した。“要”は 2 箇所で共起するので、両方の文型について調査を行なった。その結果、2 つのことが判明した。ひとつは、比較構文が連体修飾句に用いられている文では、“比”の前に“要”を付加することがほぼ認められなかったことである。

（41）男子双人滑比赛，年仅 13 岁的张晓丹与比他大 3 岁的张昊是头一次参加国际比赛，他们的合作是从年初开始的。他们动作难度高，尤其是捻转托举完成得很漂亮，超过了名列第二、三名的俄罗斯选手。（1998 年人民日报）

→*／??年仅 13 岁的张晓丹与要比他大 3 岁的张昊是头一次参加国际比赛，

（42）他们中间年纪最大的已经 40 岁，最小的只有 18 岁，其中，三个年纪相近的同学很要好，最小的陈伟荣，来自广东罗定县，还有两个比他大一岁多的黄宏生和李东生分别来自海南五指山和惠州。（吴晓波《激荡三十年：中国企业》）

→*／??还有两个要比他大一岁多的黄宏生和李东生分别来自海南五指山和惠州。

（43）张光斗先生生于 1912 年，1934 年毕业于上海交通大学土木系。江泽民 1947 年毕业于上海交大电机系，张光斗是比他高 13 届的“老学长”。（江泽民习惯称届次比自己高的校友为“学长”，如果另有师生之谊，则一定尊称为“老师”。）

（CCL\ 当代 \ 报刊 \ 作家文摘 \1997）

→*／??张光斗是要比他高 13 届的“老学长”。

例（41）から（43）では“比 + B + W”が連体修飾句を構成しているが、“比”の前に“要”を付加した文に対して、アンケート回答者の全員が不成立もしくは成立が微妙だと回答した。一方、“要”を形容詞の直前に付加した文は容認度が上がるが、やはり元の無標の文の方が自然であるという回答であった。2 回目の調査では、先に述べたように計 20 の例文を選んだが、その半数の 10 例は“比 + B + W”が連体修飾句に用いられているものであった。結果として、その 10 例のすべてに対して、“比”の前に“要”を付加した文は成立しない／成立しにくいと判定された。

判明したことの 2 つ目は、比較構文が独立した文である場合（すなわち“比”以下のフレーズが文の述語になっている場合）は、連体修飾句の時とは異なり、形容詞の直前に“要”を付加した文が、元の無標の文と同等に成立するか、元の文より自然である（適している）と判定されたことである。上の連体修飾句の場合と同様に、調査に使用した例文の一部を以下に挙げる。

（44）几十年来，他只作过一次关于杨子荣的报告，实在推托不了，只好找曲波，让曲波帮他把存下来的记忆理了理，才去讲的。杨子荣是他的排长，比他大 15 岁，战斗中保护过他这个年龄最小的兵。谈到杨子荣，他依旧老泪洒落。（CCL\ 当代 \ 报刊 \ 作家文摘 \1994）

→“杨子荣是他的排长，比他要大 15 岁”が同等か、より適切であると判定された。

（45）我的卫兵们看见至少有 4 名刺客在开枪，可刺客的人数也许还要多些。当烟雾消散的时候，我们发现同我并肩走的我的秘书，肚子、臀部和胳膊都中了枪弹。子弹是从两侧打进他的身体的。他的帽子和公文包弹痕累累。我比他高好多，可是我哪儿也没有伤着，简直

是个奇迹。（《宋氏家族全传》）

→“我比他要高好多”が同等か、より適切であると判定された。

（46）关于周恩来，我想提一下《周恩来传》记叙的他到江西苏区后同毛泽东的关系。当时，他在党内的地位明显地比毛泽东高。一九三二年七月，中央局提议由周兼任红一方面军总政委，他当即两次提出：这一提议事实上让苏维埃政府主席毛泽东在前线无事可做，而且使自己这个中央局书记多头指挥，应该由毛任总政委。（《读书》vol.124）

→“他在党内的地位明显地比毛泽东要高”が同等か、より適切であると判定された。

アンケート調査で用いた20例のうち、比較文が連体修飾句となる10例を除いた残りの10例は、すべて“比”以下のフレーズが文の述語になっているものであったが、そのうちの8例に対して、形容詞の直前に“要”を付加した文が同等に成立するか、元の文よりも適切さにおいて勝ると判定された。この調査結果は重要な意味を含んでいる。元の無標の文はいずれもコーパスから採取したものであり、文法的に正しいものである。その文の形容詞の直前に“要”を加えても、元の文と同等に自然か、あるいは元の文よりも自然であると判定されたことから、2つの分析が導き出される。それは、（ⅰ）“要”はもはや統語論のレベルで働いてはいない、（ⅱ）同じ環境で両立することから、“要”の付加は意味論の面でも、語の総和としての文の有する意味に影響を及ぼしていない（つまり、「“要”の付加により、無標の文に何らかの特定の意味は加わるものの、文意の違う両方の文がいずれも文法的に成立する」というわけではない）、ということである。

以上がアンケート調査で得られた主要な結果である。前節で述べた実例調査で得られた結果にも基づいて、次節では比較文に共起する“要”の機能について、本稿の分析と結論を述べる。

5. 調査結果に基づく分析と本稿の結論

上で述べてきた実例およびアンケート調査の結果に基づき、本稿は比較文に共起する“要”の機能について、以下の（47）で示す新たな分析を提案する。

（47）**“要”は単純比較文に付加されることで、文中での位置に関わらず、文を「特性記述文」に転換する。“要”が共起する比較文は、単に2つの比較項の優劣のみを表すのではなく、比較項Bとの比較差を用いて主語Aの人物や事物（もしくは事態）の特性を表す文となる。“要”は比較文の性質と、その伝達する情報を転換する標識（marker）として機能する。**

“要”の付加により、“比＋B＋W”のフレーズ全体、あるいは主要述語の“W”が属性を描写する表現となり、主語や前接する事態の特質を物語る。要するに、“要”は比較文の述語の表現機能を変え、文が伝える情報の種別（内容）を変更する標識として機能するということである。

ただし、程度副詞“更・还”を用いた文とは文法および意味の面で違いがあるので、小野1998で提唱した「特定記述文」とは異なる「特性記述文Ⅱ」として区別する。比較文に共起する“要”と程度副詞“更・还”との違いは、“要”自身が程度を表さないということと、“要”は文中で複数の位置に共起可能であること、さらに、“更・还”を用いる文では比較項Bが程度の高い属性を有する必要があるが、“要”の場合は必ずしも比較項Bの性質に程度の高さが備わっ

ていなくても良いということが挙げられる（ただし、“要”もBの属性の程度が高いことを妨げるわけではない。また、文中に“要”と“更・还”がともに共起する文は、2種の特性記述文の融合型と見做す）。

“要”が共起する比較文は、ある基準に基づいて、主語Aが比較項Bとは異なるレベルにあることを提示することで、それがAの特筆すべき属性になっていることを伝達する文である。“要”は単純比較文を特性記述文に転換するために機能するものであって、文に（「推量」などの）特定固有の語義を付加せず、また焦点化や強調を表す語でもないと本稿は考える。“要”は「比較の結果（優劣）の表示」から「主語の特性記述」へと、比較文が伝達する情報を変更する機能を有するがゆえに、調査結果からもわかるように、独立した単純比較文の多くに付加することが可能である。ただ、純粋に二者の優劣のみを伝える「単純比較文」には“要”を付加することは難しい。

再三述べてきたように、無標の比較文は、本来、二者を比較してその優劣を表すものである。ただ、無標の比較文であっても、「主語の特徴や性質を表す」という意味を（含意として）読み取ることが可能な場合が往々にして存在する。その点において、“比”フレーズが述語となる文の場合は、明確に二者の優劣だけについて言及するという文脈や環境がなければ、有標（“要”有り）と無標（“要”なし）の文の厳密な使い分けは認めにくい。それゆえに、母語話者が互換性を認める文が少なくないのである。この点について、もう少し説明を補おう。

（48）也许从小到大，家庭的不圆满也对我影响很大吧。我妈妈比我爸爸小10岁，就在工厂里当工人，爸爸当官当惯了，总是训斥她，说她“大老粗懂什么”之类的，家里气氛一直不好。（CCL\当代\文学\大陆作家\安顿）

例（48）では、比較文で両親の年齢差が述べられている。この文自体は年齢という基準で両者を比べた結果を示しているのであるが、前後の文脈から考えて、この文は父親と対比しつつ母親の像（父親よりも結構年下で、社会的な立場も強くない…）を描いているとも読み取ることができる。そのような読みに基づけば、“要”の付加は可能になる。このことを前の節で挙げた例文で補足すると、第3節の例（22）“有的鲸鲨长五十几英尺，重十五吨，比非洲象要重两倍。”で言えば、この文は世界最大の魚類であるジンベイザメの大きさを説明する文である。15トンという数値も表示されているが、「アフリカ象より2倍重い」という情報によって、読者はジンベイザメの特性（巨大さ）について、より具体的なイメージを持つことが可能となる。“比非洲象要重两倍”という比較フレーズ全体がジンベイザメの特筆すべき属性だということである。一方、第4節の例（37）“今天还不到30度，比昨天凉快得多。”や、例（38）“我们研究科2021年有366名留学生，2020年有342名。去年比前年多一点。”は、文脈から見て純粋に二者の優劣を表していると解釈できる文である。また、逆に言えば、これらの文は状況から見て、主語である“今天”や“去年”の特筆すべき属性を語っている文ではない。このような場合、“要”を付加する容認度はかなり低くなる。

本稿の冒頭で引用した《现代汉语八百词》は、“要”の位置によって意味は変わらないと述べている。《八百词》が記述する“要”の意味（“估计”）に本稿は同意しないが、文中での位置が異なっていても“要”の機能に変わりはないという点では同じである。ただ、第4節で述べたように、“要”の位置の違いによって、その統語的振る舞いには違いが生じる。それが連体修飾句

に用いられるかどうかであった。“要比～”のフレーズが連体修飾に用いられないのは、このフレーズが有する文法的（構文的）特徴と密接な関係があると思われる。それは、“要比～”型の句は「名詞性の主語」と組み合わされる比率が高いのに対して、“比～要”型の句はその比率が下がり、「主述構造」など非名詞性の句に後続する実例が多いという言語事実である。両者の差を裏付ける調査として、各フレーズの直前にコンマ（逗号）のある実例をコーパスで調査した結果、以下の結果が得られた（一例として主要述語が“多”の調査結果を示す。「～」は 10 文字以内で検索）。

◆“，要比～多”：全実例数 142 例のうち、名詞性主語の文 112 例（78.9％）

（49）他的书架上，小学、初中、高中、直至大学的数学教材，成套齐备，各类数学奥林匹克竞赛书籍不计其数，而教育学、心理学、逻辑学、哲学等专著也是林林总总，因为他明白：教师应该知道的东西，要比教给学生的多十倍、二十倍。（1994 年报刊精选）

（50）令人不安的是，在当今的家庭中，父母对孩子说『不行』的次数，要比说『行』多得多。（1995 年人民日报 \3 月份）

検索する際にフレーズの直前にコンマ（逗号）を付したのは、全体の母数を減らしつつ、前に主題が来る率を上げる意味であるが、“要比”の場合は例（49）（50）のように、名詞性の主語（主題）と組み合わされている実例が全実例の 8 割近くあった。“比～要”型ではこの数値がかなり変わる。

◆“，比～要多”：全実例数 113 例のうち、名詞性主語の文 25 例（22.1％）

（51）中国移动电话数量已达 5000 万部，比个人电脑的数量要多得多。（2000 年人民日报）

（52）在哈努诺人的语言之中，对植物的各个不同部位的命名，树根、树干、树叶、树茎等达到了 100 至 200 种之多，比我们汉语中的要多几十倍，比英语、德语也是同样的多。（叶舒宪《人类学与文化寻根》）

“比～要”型の場合は名詞性主語と組み合わせられている実例数は 2 割強にとどまり、それ以外は例（51）（52）の波下線部で示すように、主述構造の文（フレーズ）に後続しているものが多数を占めていた。主要述語が“多”以外のいくつかの形容詞でも同様の調査をしてみたが、前接する語やフレーズの性質（名詞性か否か）の比率に大きな違いはなかった。

ちなみに、無標の“比～”フレーズは名詞性の主語以外にも種々のフレーズとの組み合わせが可能である。以上のことから、“要比～”では“比＋ B ＋形容詞句”全体が“要”のスコープに入り、その句全体が陳述部となって主語 A を主題とした主題化構文を構成する傾向が非常に高いと分析できる。陳述部全体が主語の特質を物語る情報であり、それによって主題の特性を主張するのがこの型の文の有する主要な機能であるがゆえに、その陳述部に該当するフレーズ全体を連体修飾句という情報の背景化を引き起こす位置で用いることは表現論的に抵触するのだと考えられる。形容詞の直前に“要”が付く場合は、“要”のスコープに入るのが述語の形容詞句（すなわち比較の結果部分）だけになるので、“比～”のフレーズ全体を支配しておらず、結果として無標の“比～”フレーズとの差が縮まり、連体修飾で使用することの許容度も無標のフレーズに近づくのである。以上の分析により、“要”自身の機能は同じであっても、“要比～”型と“比～要”型は構文構成上の性質に起因して、統語的な振る舞いにおいて相違点が生じるのだと考えられる。

ここで、本稿の分析を支持すると思われる言語事実をいくつか挙げてみたい。まず、比較文の“要”がひとつの文で 2 箇所同時に用いられている実例が存在することである。

（53）这独木舟是个漂亮的东西，如果这对夫妻到店面去买的话，就要花不少钱，我们的这位律师朋友知道，这独木舟对他们来说要比对他自己要贵重得多。（《哈佛管理培训系列全集》）

（54）两个磁体间的距离又要比两个磁体本身的长度要大得多（一般 10 倍以上），这样方可作为“点磁极”对等；……　（程稳平《21 世纪的牛顿力学》）

（55）据中国人民银行统计，截至 9 日止，全国国库券的销售额已近 177.3 亿元，其中二年期国债已发行了 81.3 亿元，三年期国债发售了近 96 亿元。从前 9 天的国债发行情况看，中心城市、大城市的销售情况一般比中小城市要好，城市要比农村要好，内地要比沿海情况要好。　（1994 年人民日报第 2 季度）

先行研究が指摘するように、“要”が「推量」や「主観的判断」などの特定の意味を表すのであれば、こういった二重使用は冗長である。また、一部の先行研究（许国萍 2005、何雨芯 2014）は、“要”の位置が変わることで際立たせる対象が異なる（“要比～”は比較項 B、“比～要”は述語の形容詞句）と指摘するが、（53）から（55）のように同一文中の 2 つの位置で“要”が同時に使用される実例があることから、焦点化の機能を持つという分析も妥当ではない。同様の理由により、“要”が「判断を強調する」という分析も正しくないことがわかる。本稿の分析では、“要”の機能は単純比較文を特性記述文に転換することにあり、“要”自身は文に特定の語義を付加せず、統語的な機能も担っておらず、文が伝達する情報を変える標識（marker）として働くので、2 箇所同時に重ねて使用する現象に対しても説明が可能である。実義がなく、統語的要素でもないからこそ、重ねて使用することも憚られないし、また重ねて使っても機能に支障が出ないのである。

次に、実例を調べてみると、主要述語が単独の形容詞で、その直前に“要”が共起する文（つまり“比＋B ＋要＋単独の形容詞”で文が終わる実例）の場合、文に副詞“还”も共起する比率が比較的高いことがわかった。先に述べた「融合型」である。いくつかのデータ数を示す。

（56）“比～要大。”（～は 10 字以内）で検索した場合の実例数 175 例
→ そのうち、“还要大”と“还”も共起する文は 104 例（59.4％）
“比～要高。”（～は 10 字以内）で検索した場合の実例数 170 例
→ そのうち、“还要高”と“还”も共起する文は 51 例（30％）
“比～要长。”（～は 10 字以内）で検索した場合の実例数 39 例
→ そのうち、“还要长”と“还”も共起する文は 16 例（41％）
“比～要多。”（～は 10 字以内）で検索した場合の実例数 279 例
→ そのうち、“还要多”と“还”も共起する文は 151 例（54.1％）

“比＋B ＋要＋単独の形容詞”の文で、“还”も共起する比率が比較的高いのは、形容詞単独では主要述語部分の有する情報量が最小であり、また単独の形容詞は通常は分類を表すので、“还”を組み合わせることで「特性記述」の機能を強化しようとする要請が働くのではないかと推測できる。今回の調査において、数名の母語話者が、「主要述語の部分がたとえば“大得多”や“长 10 倍”のように、差が大きいことを表している方が、“要”の付加が容易である」というコメントを寄せてきた。本稿の分析に基づけば、差が大きいほど主語 A が比較項 B と異なるレベルに

属していることが明白になり、それが主語Aの特性として認識されやすいことがその原因であると思われる。ちなみに、“比＋B＋要＋単独の形容詞”の文に副詞“更”が共起する文も存在するが、同じ条件で検索すると、その数は“还”よりも少ない。“更”はより純粋に程度差を表すので、比喩なども含め幅広く特性記述を行なう“还”の方が、より「特性記述」化に貢献するのがその理由であると考えられる（ただし、“更”の付加も「特性記述」機能を強化している点では同じである）。

もう一点挙げると、比較項Bが人称代名詞の“他”である実例を調査してみると、無標の文の数が圧倒的に多いことが判明した。これも一部のデータ数を示す。

（57）	比他大　205例	比他高　128例	比他好　72例
	要比他大　1例	要比他高　2例	要比他好　4例
	比他要大　3例	比他要高　2例	比他要好　1例

人称代名詞は照応表現に用いられる形式であり、それ自身（“他”という語そのもの）には属性の情報量が乏しいので、特性記述文に用いられる頻度が低いのではないかと考えられる。逆に言えば、一般に、比較項Bの属性が明確なものであるほど、特性記述としての効果が高まるということである。（57）において“要”が共起する少数の実例では、“他”が指す人物（概ねその世界では著名な人物名か、物語の登場人物である）はいずれもその前の文脈で出てきており、その属性も先に了解されている。そういう条件であれば人称代名詞を用いた特性記述文も成立はするが、文単独で特性記述の機能を発揮させるという観点からすれば、具体的な属性を有していることがわかりやすい名詞や句を比較項Bに用いている文の方が、実際には多いということであろう。

6. 本稿の分析と結論に基づくさらなる考察

前節では、比較文に共起する“要”の機能について、本稿の調査に基づく分析と結論を述べた。ちなみに、森宏子1996で指摘されており、筆者自身も検証したが、“比字句”と同じく比較文に属する“A跟B一样”［AはBと同じ］の文には“要”を用いることはできない。その理由は、“要”が「比較差を用いた特性記述」によって主語の特徴を表すという機能を有することにあると本稿は考える。“要”は比較の結果、主語Aが比較項Bとは異なるレベルに属していることをその特性として表す。“A跟B一样”においては、比較する二者が「同一・同等」の関係、つまり同じレベルにあるので、この文では主語Aだけが独自に有する特質を述べることができないのである。

本節では、本稿の分析に基づいて、比較文に共起する“要”がさらに別の機能を有している可能性と、“要”の「特性記述化」機能を齎す意味的な側面について考えてみたい。

比較文における“要”の機能は、「二者の比較とその結果（優劣）」という命題に対する話者自身の認識に関わるものではなく、単純比較文を主語（である人物・事物もしくは状況・事態）の特性記述文に転換するという表現レベルに属するものであるが、さらに、情報を上書きしたり、新規に提供したりする状況で多用されることから、“politeness”に属する対人的モダリティの機能の方へも拡張していると考えることが可能である。情報や前提を更新する場合、相手にとっては自分の認識や基準としていたものが覆されることになる。その際に無標の比較文を用いると、

比較の結果（優劣）の情報が真っ向から示されるため、相手の体面や心情を害する恐れがある。また、新規の情報を導入する際には、何の前提もなくいきなり二者の比較とその優劣を提示されると、その比較の提示そのものや比較を持ち出す必要性に疑問を感じたり、優劣が示されることの意味に関して戸惑いを感じたりするかもしれない。“要”を用いて特性記述文に転換することで、文は比較文のかたちを取りながらも主語の属性を描写する形容詞述語文になり、無標の比較文であれば生じ得るかもしれない相手の疑問や戸惑いを解消することができる。

かつて、テキストや辞書には、比較文の“要”は「語気を和らげる」という指摘と、「語気を強める（強調する）」という正反対の指摘がともに存在していた。いずれも母語話者の語感に基づいた指摘であると思われるが、上で述べた“politeness”に属する対人的モダリティ機能が首尾良く発揮されるとすれば、あからさまに優劣のみが伝えられていないことにより、「語気が和らげられる」と感じる母語話者がいるのではないだろうか。また逆に、“要”は主語の特性記述を行なうので、そこで述べられる属性は大なり小なり特筆すべきものである。比較項との「差」が顕著であると思われるほど、特性記述の効果も高まる。それに対して「語気を強める（強調する）」と感じる母語話者も存在するのであろう。“要”自身は実義を付加せず、文の表現レベルの機能に関わる要素であるからこそ、語気の強弱について、正反対とも思える両方の感覚が母語話者に生じる可能性を孕んでいるのだと考えられる。

比較文に共起する“要”について、多くの文法書や辞書ではこれを助動詞（中国語では“能愿动词”）と認定している。一方で、近年の先行研究では副詞（“语气副词”）と分析しているものも存在する。副詞と認定する研究ではその根拠として、比較文の“要”は正反疑問、すなわち“要不要”のかたちで疑問文を構成しないことを挙げている。これは言い換えれば、比較文の“要”には否定形が存在しないということを意味する。一般に、助動詞（“能愿动词”）は“不”を付加して否定形を作ることができるから、比較文の“要”は助動詞ではないという考え方である。しかしながら、比較文で用いる場合以外の“要”の用法、たとえば、本稿第 2 節でも触れた「近未来の事態発生」を表す“要”［もうすぐ／今にも～する］（e.g.“天要下雨了。”）、および「習慣的・反復的事象の可能性」を表す“要”［～することにしている・～するものだ］（e.g.“我现在天天吃药，经常要去医院复查。”“这种螺丝有时要松动。”）も、やはり“要”を用いた否定形（否定文）が存在しない。それにも関わらず、これらの用法の“要”を助動詞と認定しているものも多く、かつ、そのことに疑いを挟む議論や考察はあまり存在しないように思われる。「近未来」や「習慣的・反復的事象の可能性」を表す“要”に否定形が存在しないのは、実際問題として、そういう事態が現に「発生」しているがゆえに発話するからである。“要下雨了。”［もうすぐ雨が降りそうだ］という文は、雲が厚くなって、いかにも雨が降ってきそうな空模様を見て言うのであり、“要撞上了！”［ぶつかる！］というのは、たとえば乗っている自動車がまさに接触や衝突を起こしそうな刹那に発せられる台詞である。また、“人总是要死的。”［人はどのみち死ぬものだ］や“过春节都要吃饺子。”［旧正月のお祝いには餃子を食べる（ものだ）］というのは必ずそういう事態が発生することを表しており、その意味において、（“要”そのものを否定するかたちの）否定文は存在しない。そのように考えていくと、単に否定形・否定文が存在しないからという理由だけで、そういった“要”を助動詞ではなく副詞だと認定するのは、正確な分析だとは言えないかもしれない。

また、“要”を副詞と認定する場合は、種々ある副詞の中で“语气副词”であると分析する研究が殆どであるが、中国語の“语气副词”は、たとえば、“难道”［まさか（～ではあるまい）］、“居然”［なんと・意外にも］、“偏偏”［あいにく］のように事態の発生に対する話者の捉え方や評価を表すものや、“也许”［あるいは～かもしれない］、“大概”［たぶん～だろう］のように事態の実現の可能性に関する話者の見込みを表すもので占められている。本稿の分析によれば、比較文の“要”はそのいずれにも該当せず、従って仮にこれを副詞と認定するとしても、既存の副詞の分類項には収まらない。このように、比較文の“要”を品詞体系のどこに位置付けるのかは難しい問題であるが、“要”は比較を示す句や比較の結果を表す形容詞句に前接して、それを属性表現に転換する機能を持つという本稿の分析に従えば、やはり機能面では副詞に該当すると考える方が妥当であるように思われる。ただ、その場合は副詞の新たな下位類を立てる必要があるかもしれない。

最後に、単純比較文を特性記述文に転換する要素として、なぜ“要”が使用されるのか、ということについて、意味の面からひとつの可能性を提示しておきたい。助動詞として、“要”は「義務」「願望」「予定」などを表し、さらに本稿でもすでに言及したように「近未来に起こる出来事」や「反復的に起こる事態や習慣的な行為」を表す。これらすべてに共通している意味的特徴は、「発話時には未実現であるが、その実現が見込まれる行為や事態」を表すということである。換言すれば、“要”の表す意味領域は「非現実“irrealis”」の範疇に属し、かつその大半はLangacker1991のいう「投射された現実性“projected reality”」に属するものとも言えるであろう。しかし、本稿が考察対象とする比較文で用いられる“要”は、それ以外の用法の“要”と異なる点が2つある。ひとつは、通常、“要”が共起する対象は動詞句であるのに対して、比較文では形容詞句であること。もうひとつは、比較文が未来のことについて述べているのでなければ、“要”が修飾する比較フレーズや比較の結果は「現実“realis”」のものだということである。両者を繋ぐ鍵は、「反復的に起こる事態や習慣的な行為」を表す用法ではないかと考えられる。

（58）午休之后他要去公园散步或是去书店、商店买点东西。（1993年人民日报2月份）

（59）在人类数千年的文明史上，曾出现过文明之间的磨擦、碰撞和冲突，一种文明排斥其他文明，试图把一种价值观强加于其他文明之上。历史表明，这与人类发展方向背道而驰，也是注定要失败的。（新华社2001年9月份新闻报道）

（60）厄瓜多尔国家工学院地球物理所所长耶佩斯说：“这种火山活动有时候要持续几周，在此期间很难对火山喷发造成的影响进行评估。”（新华社2003年8月份新闻报道）

例（58）では、主語が人間（「彼」）であり、その人の日常の習慣（日課）を述べている。例（59）では、人類の歴史において、他所の文明を排斥し、自分たちの価値観を押し付けるような行為は、常に失敗に終わることを述べている。例（60）では、当該の火山活動が時に何週間にもわたって持続するものであることが述べられている。こういった事態を表す“要”は、厳密に言えば未来における可能性について言及していると言えるが、一方で、経験上その実現がほぼ決定されている事態であるとも言える。ゆえに「行為や状況の規定化」と言い換えることができるものである。特に、無生物主語であれば、それは一種の属性表現と解釈することも可能である。例（60）で言えば、何週にもわたって噴火活動が続くということが、当該の火山活動の属性であると見做せるし、また、“这种螺丝有时要松动。”であれば、その種のネジは緩む性質があるという

ことを表している。動作行為や状態変化、すなわち動的な事態について述べる場合、“要”はそれが起こるか起こらないかというレベルでの判断を示すわけだが、それが周期的もしくは頻繁に観察されると、当該の事物や事態が有する属性であると認知され得る。極端に言えば、例（58）のように自身の行為に制御力を持つ「ヒト」が主語であっても、その人物は昼休みのあとは他人と交わらず、独りで行動することが好きな人であるという、一種の属性を見出すこともできるのである。

比較文における“比”以下のフレーズは形容詞を主要述語とするため、静的な状態を表すが、無標の比較文（単純比較文）において、述語形容詞の機能は性質形容詞の有するものであり、限定的・分類的である。ゆえに、主要述語に（程度副詞を付加する以外のかたちで）状態形容詞を用いることは文法的に許されない。“你家里比我家里干净。”［あなたの家は私の家より清潔で綺麗だ］は適格な文だが、“*你家里比我家里干干净净的。”や“*你家里比我家里非常干净。”は文法的に成立しない。無標の比較文は専ら二者の優劣を表すというのは、述語の形容詞が限定的に働いていることと深く関係しており、その文に属性描写機能は備わっていないのである。そのため、単純比較文を用いて主語の属性を表す場合は、文に“要”を付加し、特定記述文に転換する。特定記述とは、言い換えれば主語の属性描写である。“要”の付加によって、限定的であった形容詞句が描写的になるということと、上で述べた「行為や状況の規定化」を表す“要”を用いた文が一種の属性（描写）表現に転じることが、意味の面でリンクしていると考えられるのである。“要”は、規定化を表す動詞述語文における認知レベルの属性表現から、比較文における形式および意味レベルの属性表現にその用途を拡げているというのが、本稿が考える機能拡張の経路である。

引用文献

小野秀樹 1998　中国語の比較文 ――“比字句”の意味と構造をめぐって，『中国語学』245 号，pp.92-101.

森宏子 1996　比較文に現れる“要”について，『中国語学』243 号，pp.104-113.

古川裕 2006　关于“要”类词的认知解释 ―― 论“要”由动词到连词的语法化途径，《世界汉语教学》，第 1 期，pp. 18-28.

何雨芯 2014　含“更、还、要”的“比”字句研究，《现代语文》（语言研究版）12 月号，pp. 41-43.

蒋平 1979　比较句中的“更”“还”“要”，《语文教学与研究》第 4 期，pp. 6-8.

吕叔湘编 1980 《现代汉语八百词》，商务印书馆（1999 增订版），北京 .

邵敬敏 1992　语义对“比”字句中助动词位置的制约，《汉语学习》第 3 期，pp. 13-15.

许国萍 2005　现代汉语“比”字句中情态动词意义分布考察，《湖南师范大学社会科学学报》，第 34 卷第 6 期，pp. 89-93.

Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. Ⅱ : Descriptive Application. Stanford: Stanford University Press.

北京大学中国語言学研究中心コーパス（CCL 语料库）：http://ccl.pku.edu.cn:8080/ccl_corpus/